

水の中の夢
——『指輪物語』における
「生と死」のテーマについて
(Dreaming in the Water: The Theme of
“Life and Death” in *The Lord of the Rings*)

渡 邊 裕 子

20世紀イギリスで言語学者兼作家として活躍したJ. R. R. トールキン (J. R. R. Tolkien) (1892-1973) は、中つ国 (Middle-earth) という架空の世界を舞台とする神話体系を創作したことで有名である。トールキンは中つ国に様々な種族を住ませ、それぞれの種族に独自の文化と言語を与えた。その世界観の壮大さと緻密さは多くの読者を魅了し、中でも彼の代表作『指輪物語』 (*The Lord of the Rings*) (1954-55) は、ファンタジー作品の金字塔として名高い。

『指輪物語』は、ホビット族の主人公フロド (Frodo) が育ての親であるビルボ (Bilbo) からある指輪を譲り受けたことから始まる。その指輪は、実は大昔に力を奪われた冥王サウロン (Sauron) の力の源であり、今また力をつけ始めた彼が完全復活する為に必要なものと判明する。フロドはサウロンの完全復活を阻止する為、指輪を破壊できる唯一の場所、サウロンの国モルドール (Mordor) へと、選ばれた仲間と共に旅立つ。『指輪物語』はフロドのこの指輪破壊の為の旅を基軸とし、エルフ族や人間族の連合軍対サウロン軍との戦いを描いた作品である。

『指輪物語』には多様な種族が登場する。例えばホビット族は子ども程の身長の見目で、他種族との交流を好まない閉鎖的な社会に暮らしているなど、各種族にはそれぞれの特徴がある。中でも他とは大きな違いを持つ種族がエルフ族である。彼等は不老不死だ。エルフ族以外の種族が命の時間の長さに関りがある (本論では、命の長さの限界が定まっている、という意味で「定命の」種族と呼ぶ) のに対し、エルフは戦争によって殺されるなどしない限り死ぬことはない。その為エルフは定命の種族と「現在」を共有しながら

らも、定命の種族にとってははるか昔の「過去」の時間をも、その鮮明に保持された記憶を通じて、同時に生きている。

定命の種族が、生まれ、老い、死ぬという時間の変遷の中に生きるのに対し、不老不死のエルフ族がある意味で静止した時間の中で生きている、というこの違いは、トールキンの神話体系において「生きることと死ぬこと」がどう捉えられているのかということを考える際のヒントとなる。例えば中つ国を舞台とする別の作品『シルマリルの物語』(*The Silmarillion*) (1977)では、自分達の命の時間が短いことに不満を抱いた人間が、不死になる為に神の国を襲撃し滅亡する様が描かれている。このように基本的にトールキンの神話体系においては、死(つまり時間の流れに沿って生きること)は神からの贈り物として受け入れられるべきものであり、反対に、死ねないこと(時間が静止していること)は一種の呪いでもあるものとして捉えられている。¹

『指輪物語』において、生と死のこの問題、また時間のあり方の種族間の違いという問題を考察する際に特徴的であるのは、定命の種族が、「夢」を通じて不死の種族と同じ時間感覚を共有する場面が描かれていることだ。これに関してヴァーリン・フリーガー (Verlyn Flieger) による先行研究は、トールキンが種族間の生と死のあり方の違いを扱う上で、エルフ族と定命の種族との間の時間感覚の違いを扱う必要性があったことに触れ、その時間感覚の違いをどのような理論で説明しようとしていたかを明らかにしている。この時フリーガーが紹介するのが、J. W. ダン (J. W. Dunne) の時間の理論である。ダンはトールキンと同時期の航空工学のエンジニアであるが、ある時、夢が一種の予知夢のような働きをしていることに関心を持ち、夢に関する実験を通じて時間についての一つの理論を作り上げた。ダンの理論で重要なことは、一つに、時間とは本来、空間と同じように存在している、ということである。本来であれば「過去」も「現在」も「未来」も同じ空間上に常に同居しているのであるが、我々の感覚は通常限定されている為に、目の前にある限られた時間を知覚することしかできない(ダンはこの時の我々の視点を観察者1と名付ける)。しかし夢はその知覚の幅を広げる為に、観察者1の視点では捉えきれなかったより広い時間—空間を捉えることを可能にする。ダンの理論では、観察者2以降、徐々に視野が広がった観察者3、4などが続き、最後に神の視点とも言える「究極の観察者」の視点にまで拡張されるのだが、フリーガーはここで途中は省略し、観察者1の視点を定命の種族の通常の見点、エルフ族の見点をそれより広い観察者2(もしくは究極の

観察者)の視点としてトールキンが描き出そうとしていたと論じる。その時間の理論をトールキンが実用可能なものとして描き切れたかどうかは議論の余地があるが、いずれにしてもそのように時間感覚の違い、特にエルフ族が空間的である「静止した」時間感覚を持っている反面、定命の種族が夢の中で以外、「時間の流れ」に沿って生きるしかないというこの対比が描かれることに、トールキンの葛藤、時間を静止させておきたいというノスタルジックな気持ちと、しかし静止した時間の中には新たな生命や成長もまた存在し得ないことへの理解、が表現されているとフリーガーは結論づけている。

このように『指輪物語』においては、夢の中で不死の種族と同じ視点、つまり時間を空間と同じ静止したものとして認知する視点を獲得することが描かれ、フリーガーの論では、「現在」という時間の幅を越えて、「未来」を見せたり、あるいは同じ「現在」でも観察者1であれば観察不可能な遠い場所で生じている出来事を見せたりする夢を個々の例を挙げて更に説明している。この考察は説得力があるものであり、本論でもこれに倣い、夢において定命の種族が観察者1の視点を離れること、言い換えれば、時間を空間的な静止したものとして捉える視点を持つことを前提とする。一方本論では、フリーガーの論では着目されていないこと、即ちこれらの夢がしばしば水のイメージとの関連で描かれていることに注目した上で、これらの夢が定命の種族にとってどのような経験となり得るのかに焦点をあてる。大河アンドゥイン (the Great River Anduin) の流れを時間の流れと比較するなど、水も時間のモチーフとの結びつきがある。加えて、水は旅の一行の傷を癒すことで生命を与える一方で、時に溺れさせることで死をもたらす二面性のあるものである。本論は、不死の種族の時間感覚を共有させる夢が、このような水のイメージによって補強されていることを明らかにし、本作において時間の流れに沿って生きることと、時間を静止させ不死でいることがどう捉えられているかを再度確認していく。水の両面性と同じく、静止したものとしての時間のあり方を経験させる夢は生命力を与えるものである反面、死よりも恐ろしい「死」を与えるものでもあるのだ。

まず1節目では、『指輪物語』における夢が、不死の種族と同じ時間感覚、即ち静止したものとしての時間を経験させるものであることを見直す。次に2節では、水と時間、及び水と生と死のテーマの関わりを確認する。続く3節で、水に関わる「夢」として特にエルフ族の地ロリエン (Lórien) での体験と、サウロンの国モルドールでの経験がそれぞれ体現する生と死の性質を考え、静止した時間の体験としての「水の中の夢」が持つ二面性を論じ、こ

これらの夢が定命の種族にとっては生命の基盤を作るものである反面、夢を見続けそこに留まることは真の生命を失うことにも繋がることを論じる。最後に4節では、本作で描かれる夢の経験のあり方が、読者による読書体験に類似することを述べ、本作で描かれている生と死のテーマがどのように読者に還元され得るかに関して考察を広げてみたい。尚本論では、本作において「夢」という言葉が文字通り眠っている間の経験以外にも多用されていることを踏まえ、本作で「夢」のような経験として提示されるものを広く夢として捉えていくこととする。

1 静止した時間の夢

1節では、『指輪物語』における夢が、静止した時間の世界を経験することを可能にするものであることを、ロリエンの地での体験を基に確認する。

本作では、特に主人公のフロドが、彼にとっての結末（指輪を破壊した後、神の国であるヴァリノール（Valinor）に迎え入れられること）を予め冒険の初めにトム・ボンバディル（Tom Bombadil）の家で夢として体験していたり、あるいは彼が知らないはずのこと（魔法使いのガンダルフ（Gandalf）がどのようにして囚われの地から脱出したのか）を夢で知ったりするなど、フリーガーが指摘するように、恰もダンの時間の理論を背景としているかのような夢が描きこまれている（本論冒頭で述べたように、ダンの時間の理論とは、時間を空間と同等のものと捉えるもの、言い換えればある場所と場所が目には映らなくても存在するのと同じように、「過去」も「現在」も「未来」も本質的に不動のものとして常に同居して存在するものとして考える捉え方である）。加えて、このように時間を空間的に静止したものとして認識する視点は特に太古の時代から存在する不死の種族の視点として提示されており、定命の種族は夢という特殊空間でそれを共有するものと表現されている。これについて顕著な例として挙げられるのが、エルフ族の地、ロリエンでの旅の一行の体験だ。ロリエンでの体験は、文字通り眠っている間の夢とは異なるが、例えばフロドの従者サム（Sam）がそこでの体験を目覚めている間の出来事なのか危ぶむという描写（“He [Frodo] turned and saw that Sam was now standing beside him, looking round with a puzzled expression, and rubbing his eyes as if he was not sure that he was awake.” (1: 457)）や、ロリエン自体が「夢の花」と言及されること（“[Treebeard said,] ‘Land of the Valley of Singing Gold, that was it [Lórien], once upon a time. Now it is the Dreamflower.’” (2: 608)）など²を

通して、夢の中での体験との類似が暗示されている。その上で、ロリエンは、この地の外の世界、つまり目覚めている間の世界では既に「過去」のものとなった時間をありありと保存している。

It seemed to him [Frodo] that he had stepped through a high window that looked on a vanished world. A light was upon it for which his language had no name. All that he saw was shapely, but the shapes seemed at once clear cut, as if they had been first conceived and drawn at the uncovering of his eyes, and ancient as if they had endured for ever. He saw no colour but those he knew, gold and white and blue and green, but they were fresh and poignant, as if he had at that moment first perceived them and made for them names new and wonderful. [...]. (1: 456)

引用中、「新しい」や「新鮮な」などの単語が繰り返されると共に、「永遠に続いてきたかのように古くも見える」この光景は、誕生したばかりの世界がそのままの形で今フロドの目の前に現前していることを示す。ロリエンはフロドや旅の一行が生きる「現在」では失われた世界、始原の時そのものの世界をみせる場所なのである。因みに、ここでは特に顕著な例として「過去」に注目したが、ロリエンの女主人ガラドリエル (Galadriel) の鏡がそれを覗くものに起こり得るべき未来の姿をみせるなど、ロリエンでの滞在は「未来」をも経験させるものであり、その点においてもこの地では恰も様々な時間が混在しているかのようである。

このように通常の時間の流れとは異なる時間のあり方をみせるロリエンの地では実際に時間が止まっているかのように感じられる。ロリエンでの滞在を終えたサムは、そこで過ごした時間を計算しようとするがどうしても合わず、「あの地では時間が経過していないようだ」と発言し、このことがロリエンにおける時間のあり方に関する一行の議論へと発展する。少し長くなるが、以下がその議論の引用である。

[Sam said,] “Anyone would think that time did not count in there!”

“And perhaps that was the way of it,” said Frodo. “In that land, maybe, we were in a time that has elsewhere long gone by. It was not, I think, until Silverlode [the name of a river] bore us back to

Anduin that we returned to the time that flows through mortal lands to the Great Sea. [...].”

Legolas stirred in his boat. “Nay, time does not tarry ever, [...] but change and growth is not in all things and places alike. For the Elves the world moves, and it moves both very swift and very slow. Swift, because they themselves change little, and all else fleets by: it is a grief to them. Slow, because they need not count the running years, not for themselves. [...]. Yet beneath the Sun all things must wear to an end at last.”

“But the wearing is slow in Lórien,” said Frodo. “The power of the Lady is on it. Rich are the hours, though short they seem, in Caras Galadhon, where Galadriel wields the Elven-ring.”

[Aragorn said,] “ [...] in that land you lost your count. There time flowed swiftly by us, as for the Elves. [...].” (1: 506-07)

ロリエンでは、「死すべき定めのある者達の土地を流れる時間」ではなく、外の世界で既に過ぎ去った時間の中に自分達がいたと主張するフロドに対し、自身エルフ族の一人であるレゴラス（Legolas）やエルフ族と親交の深いアラゴルン（Aragorn）はロリエンでも時間は確かに流れていると反論する。しかしロリエンの地の時間が実際にその外の時間と変わらずに流れていたかどうかという事実以上に注目すべきは、そこでの時間の感じ方が他の場所で感じるのとは異なるという点において全員が同意していることである。レゴラスは、周囲の時間がどんどん過ぎ去っていくのに対し、変化のないエルフ自身にとっては世界はゆっくりと動いていることに言及し、アラゴルンはサムが通常の時間感覚を失ったのは、「エルフにとってそうであるように、（周囲の）時間が我々のそばを早く過ぎ去ったから」と述べる。つまり、実際は時間のあり方に本質的な違いがないとしても、ロリエンではエルフ自身の時間感覚（定命の種族よりも広い視野で時間を捉える、ダンの理論における観察者2の視点）を共有する為に、フロドやサムにとっては、時間がゆっくり進む、あるいはほとんど静止しているかのように感じられたのである。このようにロリエンという夢の世界では、時間が静止した世界を経験するようであり、加えてそれは不死の種族の時間感覚と不可分に結びつけられていると言える。

エルフ族の地ロリエンでのこのような体験を顕著な例とし、『指輪物語』

では、目覚めている間とは異なる時間のあり方を夢として体験することが描かれている。ロリエンでの体験は文字通りの夢とは異なるが、事実そこではあらゆる時点の時間が静止して存在しているかのようである。実際はロリエンでも時間は経過していることが言われるものの、ロリエンの地、つまり夢の中にいる限りは、不死のエルフ族と同じ時間感覚を共有することが可能となるのである。このように本作では、夢を通じて、普段感じる時間の流れとは異なる時間の捉え方、時間を静止したものとして捉える不死の種族の視点を持つ可能性が描かれている。

2 水のイメージ—時間と水、生死と水のモチーフの関わり

本節では、夢と水の繋がりを考察する前段階として、先に水のイメージについて整理しておく。水は時間のあり方を表現する際に用いられる他、生と死のテーマを補強する為にも使用されている。ここでは水の両面性、即ち流れる時間と静止する時間双方を表すと共に、生命を与えるものとも死をもたらすものとも機能するその両面性を順に確認していきたい。

まずは水と時間のモチーフがどのように関連付けられているかを確認していく。水、特に川の流れが時間の流れに譬えられることはよくあることだと言えるだろうが、『指輪物語』においても時間の流れを“the flowing streams of Time” (1: 486) と表現したり、時代の流れを tide という単語で表すなどの箇所が散見される。また先に引用した、ロリエンの地での時間経過に関する一行の議論が、時間が静止しているかのようなロリエンの地を出立し大河の流れに乗ったタイミングで為されたことや、その議論の中でフロドが大河の流れを「定命の種族の者達の土地を通じて海へと流れる時間」と結び付けていることは特に印象深い。

このように流れるものとしての川と時間が類比されている一方、本作では流れのない、水たまりの中には、「現在」とは異なる時間が保存されているかのように描かれる。例えばドワーフ族の聖地鏡の湖 (the Mirrormere) がドワーフの父祖ドゥリン (Durin) が復活する時まで、池を覗く者の姿ではなく、ドゥリンが生まれて初めてその湖を覗いた時に見た星空を映し続けるといったことが例として挙げられる (1: 411-13, 434-35)。鏡の湖の場合、過去の聖なる時間を留めているが、反対に死者の沼地 (the Dead Marshes) では、かつての戦士達の遺体が沼の中に保存され、フロドが「夢を見ている者のように」そこでの光景を眺めるというエピソードが織り込まれている (2: 820)。フロドの案内役をしていたゴラム (Gollum) がこの遺体に手を伸

ばしたが触れられなかったと言うことから、この遺体は現にそこにあるものというよりも、「過去」のある時点での時間の像が沼の中に保存されているものと考えられる。このようにフロド達は、目覚めている間の世界では既に存在しなくなった時間の出来事をロリエンという夢でみたのと同じように、水を介してかつての戦争の記憶を見るのである。

一方、ここまで確認した例は「過去」の時間を留めるものであったが、反対に「未来」の出来事を覗き見ることを可能にする水もある。先に簡単に言及したが、ロリエンの主人ガラドリエルの鏡は、彼女が小川の水を汲んで注ぐと、あらゆる時間の出来事を映し出すある種の魔法の水鏡となる。サムは眠っているフロドの姿を鏡の中に見るのだが、それは後々のエピソードで出てくる、蜘蛛の毒で仮死状態に陥ったフロドの姿と一致する。ガラドリエルは、鏡に映る映像は必ずしも確かな未来ではない（その未来を防ごうとして行動をしない限り起こり得ないものもある）と言っているが、少なくともサムにとって、それは確かに現実のものとなる「未来」の出来事であった。このように、静止した水の中には、「過去」の星空であれ、「未来」の出来事であれ、ある特定の時間が静止して存在しているかのようである。

以上みてきた通り、本作では流れる水（川）が時間の流れと、一点に湛えられた水が静止した時間のあり方と関係しているが、水にはまた別の両面性、即ち生命を育むものとも死を与えるものともなり得るという両極性がある。水が生命にとって不可欠であることを強調する例としては、例えば木のような姿をしたエント族の水がフロドの友人メリー（Merry）やピピン（Pippin）を普通のホビット族よりも背が高く逞しくしたことが挙げられる。加えて、『指輪物語』では背景に描かれるのに留まっているが、中つ国の神話に登場する自然物を司る神々の中でも、水（海）を司るウルモ（Ulmo）という神は、エルフ族や人間族の歴史に干渉し彼等を直接に助ける回数が多い、特に重要視されている存在である。このように水は生命の力が引き出されるのを助けるものであるが、しかし同時にそれを奪うものでもある。例えばホビット族の多くは水を怖がる性質を持っており、実際フロドの両親は川で溺れ死んだとされる。フロドも、冒険の初めの古森（the Old Forest）で出会った意地悪な柳の木の精霊に溺れさせられそうになった（この場面での特徴は、木に水の中に落とされたと主張するフロドに対してサムが「夢を見ていたのだろう」（1: 154）と言うことである。実際この木の近くに来た時一行は抗いがたい眠気に襲われていた。次節で述べる水と夢が関連させられている一例とも言える）。このように本作では、水は生命を慈し

むものともそれを脅かすものともなり得る。本作の結末では、指輪の重荷を担ってきたことによる傷が故郷ではもはや癒されることのないフロドが神の国ヴァリノールに迎え入れられることが描かれるが、大海を渡った先、雨の帳の奥にあるこのヴァリノールがある種の天国のような地、つまり至福に満ちたものである一方で、故郷での「死」を経験することでしか到達できない国であることは水のこの二面性を象徴しているようでもある。水の中へと入ることで人は癒しを得ることもできる一方で、その中に留まり続けることは死へと繋がるのだ。

3 「水の中の夢」が与える生命と死

以上2節では、水と時間、及び死生観というテーマの繋がりを確認してきた。流れる水は時間の流れを表現し、一点に湛えられた水はあらゆる時点の時間を静止した状態で内包する。その一方で、水は生命を育むものとも奪うものともなり得る。以上のことを確認した上で本節では、水と夢という新たな結びつきについて確認し、「水の中の夢」が、時間の流れに沿って生きる定命の種族にとって生命の力を与えるものとも奪うものともなり得ることを考察する。静止した時間の世界を経験させる夢は、疲労や老いといった時間の流れによって与えられる変化に対して定命の種族を癒す。しかし同時に、夢は目覚めている間の「現在」にとっては直接的には関わりのないある種の幻でもあり、夢の中に留まり続けることは実質的な生命の喪失に繋がるのである。

最初に、夢と水の結びつきの例をみたい。『指輪物語』における夢が、静止したものとしての時間のあり方を経験させ得るものであることは1節で述べたが、そうした夢は水に入る、又は水を渡ることを入口とする場合も多い。以下の場面は、塚人 (the Barrow-wights) と呼ばれる幽霊に襲われ意識を失っていたホビット達がトム・ボンバディルに助けられた場面である。

“What in the name of wonder?” began Merry, feeling the golden circlet that had slipped over one eye. Then he stopped, and a shadow came over his face, and he closed his eyes. “Of course, I remember!” he said. “The men of Carn Dûm came on us at night, and we were worsted. Ah! the spear in my heart!” He clutched at his breast. “No! No!” he said, opening his eyes. “What am I saying? I have been dreaming. [...]”

[...].

But Tom shook his head, saying: “You’ve found yourselves again, out of the deep water. Clothes are but little loss, if you escape from drowning. [...]” (1: 187-88)

ここでは、まず実際には水の中からではないのに、トムが、ホビット達は「深い水の中から意識を取り戻した」とする点が特筆に値する。更に注目すべきことは、メリーがいきなり「心臓を刺された」と言って、自らの経験ではない話、塚人が死んだ時の経験と思われる話を口に出し、その後、それが夢であったと発言することである。これらを考え合わせると、メリー達がそこから救い上げられた「水」とは、塚人が死んだ時点の世界をホビット達に経験させていた「夢」を指すものと受け取れる。塚人が死んだ時点の静止した時間を内包する水—夢の中へとホビット達は陥っていたのだ。ここに、水と夢の端的な結びつきが窺える。

水に入ることと夢の中に入ることがこのように同一視される可能性があることを踏まえ、次にこれらの水の中の夢の経験が与える癒しの側面をみていく。ここでは再びロリエンでの経験を取り上げたい。エルフ族の地ロリエンでの体験が一種の夢とも捉えられ、かつそこでは、ダンの時間の理論における観察者2の視点をエルフ族と共有することについては1節で述べた通りである。以下は一行が川（水）を渡ってロリエンの境界へと至る場面である。

[Legolas said,] “I will bathe my feet, for it is said that the water [of the river] is healing to the weary.” [...].

“Follow me!” he cried. “The water is not deep. Let us wade across! On the further bank we can rest, and the sound of the falling water may bring us sleep and forgetfulness of grief.”

[...]. For a moment Frodo stood near the brink and let the water flow over his tired feet. It was cold but its touch was clean, and as he went on and it mounted to his knees, he felt that the stain of travel and all weariness was washed from his limbs. (1: 441)

ここでは、フロドがあえて、水の中で一旦静止し、疲れた足の周りを水が流れるのに任せていたということに注目できる。また、一行が渡ったこのニムロデル川（Nimrodel）の滝のそばでは、既に失われたエルフの乙女の声が

いまだに聞こえるという伝説があり、水（水たまりではないが、垂直方向に落ちる水）が「過去」の時点の時を保存しているということも特徴的である。川を渡った後、レゴラスが言うように、実際この滝の水音に誘われてフロドは眠りにつき（1: 448）、その後、夢に譬えられるロリエンの地へと入っていく。川（時間の流れ）の中で静止し、滝の音（「過去」の時間）に想いを馳せることで疲れた体を癒すと共に、夢の世界で、この場面の直前に降りかかった旅の一行の指導者ガンダルフの死（実際は後に死んでいなかったことが判明するが、少なくともこの時点で旅の一行は彼が死んだと思っている）という悲しみからの癒しを得ていることに、生命を育む、水の中の夢の一側面が窺える。

このように水の中の夢は、時間の流れによって生じる疲れや、死という悲しみから夢見るものを解放させる効果がある。しかし夢の中でメリーが心臓を刺されても実際には死ななかったように、あるいは死者の沼地にある戦士達の遺体が触れられない幻影であったように、この静止した時間の世界における老いからも死からも解放されたかのような体験もまた一種の幻でしかない。ロリエンでは不死のエルフの時間感覚を定命の種族の者達も共有したが、ロリエンで時間が静止しているかのように思われたこともまた実際には事実とは異なることをアラゴルンやレゴラスの指摘は明らかにしていた。静止した時間の世界を垣間見せるこのような幻の夢の世界と目覚めの世界を混同し、時間の流れを止め続けようとするのがむしろ生命の流れを断つことであることを、水の枯れ果てた国モルドールの地で体験は明らかにする。以下では、モルドールという悪夢の経験について確認することで、生命を奪うものとしての水の夢について考察したい。

モルドールはロリエンと対照的な土地である。ロリエンの主人ガラドリエルが力を持った存在としてしばしばサウロンと対比的に描かれることから、ロリエンとモルドールは対照的な対であるかのようだ。しかし、力の指輪を譲ろうと言うフロドの申し出を断るガラドリエルが、指輪を使えば自身サウロンようになってしまうことを恐れる故に、指輪を使うことよりむしろ時代の流れに従ってエルフ族が力を失っていくことを受け入れる道を選んだことから分かるように、サウロンはガラドリエルが時間の流れに抗って存在することを選んだ場合にそうなり得たかもしれない存在でもある。ロリエンが夢の世界であるならば、モルドールもまた夢の世界であり、³ 同時に、ロリエンという夢が減ぶことを否定した場合に、そうなり得るかもしれない夢の形とも言えるのだ。

このようにモルドールでの経験のある種の夢と捉えた時、時間や水というキーワードとの関連でどのようなことが考えられるだろうか。まず、時間に関して言うならば、暗黒に覆われたこの地では時間を推し量ることが難しい（“The night seemed endless and timeless [...]” (3: 1229-30)）とされているように、まるで「過去」も「未来」も同じ時間がずっと続いているかのようだ。実際、この国の主人であるサウロンが体現する一つの物は、このように「時間を静止させること」だと言える。サウロンの一つの指輪はそれを所有する者に不死とも見える長寿（つまり時間の静止）を与えることが、フロドの前の指輪所持者であるビルボを通して表現されているし、またその指輪をはめた者は指輪の幽鬼（the Ringwraiths）（過去に指輪の力に魅了されてサウロンの奴隷となった者達）の「現在」みえている姿ではない本当の姿（かつて人間の王であった頃の姿）を垣間見ることができる。これらの点を踏まえるならば、本作で最も重要なモチーフであるサウロンの一つの指輪は、静止した時間の世界を「夢」見ることと類似する経験を持ち主に与えていると言えるのである。

このように「夢」を簡易的に生み出す装置たる指輪は、それを重荷として感じ始めたフロドに、夢と目覚めている状態の境を曖昧に感じさせ始める。モルドールの国を進むフロドは、だんだんと「火の輪」を夢に見始めるようになり、遂にはそれが目覚めている間も見えるようになったと言う（3: 1226）。ここで火の対極である水のモチーフとの繋がりを挙げるならば、指輪のイメージが「火の輪」であることをはじめ、モルドールの中に潜入したフロドとサムが水の枯れた川床を進んだり、ずっと喉の渇きに苦しめられたりするように、サウロンの国は本来あるべき水がなくなってしまった国として強調されている。即ちモルドールは、例えばロリエンの夢が川を境界として外と内が区別されていたこととは違い、言わば本来あるべき水（夢と目覚めている世界の境界）を枯らし、夢が目覚めている世界まで浸食してしまったような場所だと言えるのである。こうしたことは、以下の引用に示すように、これまで平和しか経験してこなかった人間の兵士達にとって、サウロンという「悪夢」が現実のものとなったこととも対応する。

[T]o them [the people who are not trained soldiers] Mordor had been from childhood a name of evil, and yet unreal, a legend that had no part in their simple life; and now they walked like men in a hideous dream made true [...]. (3: 1160)

以上述べてきた通り、サウロンが指輪の力を使ってもたらず一つのは、時間を静止させた夢を現実化することだと言える。しかし、例えば指輪によって与えられた長寿が「ただ薄く引き伸ばされた感じ」と表現されているように (1: 42)、あるいは目覚めている世界と夢が逆転してしまったフロドがもはや故郷で癒されることがないように、⁴ これらの夢が与える死のない状態は、本来あるべき生命の姿とは異なるものであることが暗示されている。同様のことは、太古の時代、不死を望むあまりあるべき形としての生命のあり方を失い、最終的には神による洪水に飲み込まれ没したヌーメノル (Númenor) の人間達のエピソードにも窺える。ヌーメノル人の末裔であるファラミア (Faramir) は、フロドが指輪を破壊した時に生じたモルドールの国の崩壊をそうとは知らずに遠くから眺めながら、その光景が、自身がこれまでしばしば見ていたヌーメノルの没落の瞬間の夢を思い出させると話す。確かに、モルドールが陥落する様と、ファラミアが見るヌーメノルの崩壊の様子には類似点がみられる。以下の引用①はモルドール崩壊の様子、②はヌーメノル崩壊の様子である。

- ① [...]. Towers fell and mountains slid; walls crumbled and melted, crashing down; vast spires of smoke and spouting steams went billowing up, up, until they toppled like an overwhelming wave, and its wild crest curled and came foaming down upon the land. [...]. (3: 1239)
- ② [Faramir said,] “ [The uproar reminds me] of the land of Westesse that foundered, and of the great dark wave climbing over the green lands and above the hills, and coming on, darkness unescapable. I often dream of it.” (3: 1261)

文字通り大海に没したヌーメノルの国だけではなく、これまで水が存在しない国として描かれていたモルドールの崩壊においても、その様子が波に飲まれるかのように描かれていることが特徴的だ。モルドールの陥落がファラミアの夢と結び付けられることで、モルドールという静止した時間の世界の夢が再び大海（水）の中、夢の中へと沈んだことが暗示されているとも考えられるだろう。その上で、この洪水の夢自体は悲惨なものであるのに、ファラミアは今この夢のことを語りながら希望を見出していると言うのである。

フロドとサムはモルドールの乾いた大地を歩く途中で、「海から集められ

た雨が不幸にもこの地に落ちた後の残り水が少しだけ流れている場所」に出会い、渇きを癒す。

Unbelievable, but unmistakable. Water trickling. Out of a gully [...], water came dripping down: the last remains, maybe, of some sweet rain gathered from sunlit seas, but ill-fated to fall at last upon the walls of the Black Land and wander fruitless down into the dust. Here it came out of the rock in a little falling streamlet, and flowed across the path, and turning south ran away swiftly to be lost among the dead stones.

[...].

The water was cool but not icy, and it had an unpleasant taste, at once bitter and oily, or so they would have said at home. Here it seemed beyond all praise, and beyond fear or prudence. [...]. (3: 1204)

大河アンドゥインをはじめ川の流れて行き着く先に大海があり、その海水が新たな雨水となって大地に降り注ぐことは、水の巡りを象徴するものである。大海を基準としたこの水の巡りがフロド達の生命をこの場で癒したことは、同じく大海に沈んだようにもみえるモルドールが時間の巡りの中に組み込まれ、結果新たな白の木の誕生と、エルフ族の時代に代わる人間族の時代という新しい生命への巡りに繋がったことの重要性を補足するものであるだろう。以上みてきたように、静止したものとしての時間を経験させる水の中の夢とは、老いや疲労、死のない世界を提示することで一時的に夢見る者を癒す反面、夢を見続けること、あるいは境界としての水を枯らし夢と目覚めている世界を混同することは、本来の生命を喪失することにも繋がるのである。

4 物語を読むということ

定命の種族は夢の中で、目覚めている間の時間の感じ方とは異なるあり方、特に不死の種族の時間感覚を経験する。この夢はしばしば水を境界として入るものであり、本論では、水が、時間というモチーフや死生観に関するテーマと繋がり得るものであるという前提に立ち、「水」という観点から、こうした夢の存在意義を捉え直した。水の中の夢は、静止した時間の世界を一時的に見させることで時間の流れと共に生じる変化を癒す反面、そこに留

まり続けることは本来の生命の巡りを失うことにも繋がる二面性を持つのである。以上述べてきたことも踏まえ、本論最後の4節では、夢を見ることと共通するもう一つのもの、即ち物語を読む行為について言及することで、水の中の夢に関する今回の考察が我々読者にとってどのように還元され得るかを論じ結論にかえたい。

夢を見ることと物語（特にファンタジー作品）を読むことの類似についての指摘は、作者トールキンをはじめ、彼に影響を受けた別の作家アーシュラ・K・ル・グウィン（Ursula K. Le Guin）や、ファンタジー作品というジャンルについて論じる批評家ブライン・アトベリー（Brian Attebery）など、枚挙に遑がない。⁵ なぜ、夢と特にファンタジーを読む行為が類似しているのかについて挙げられている根拠は様々であるが、確かに、時間というを中心としてみた場合、物語を読む行為と本作で描かれる静止した時間の世界を体験させる夢には共通点がある。そもそも、例えばロラン・バルト（Roland Barthes）などが指摘しているように、物語内の「時間」とは特殊なものである。⁶ 物語の中では「時間」は語り手によって操作し得るものであるし、それ故ジェラルド・ジュネット（Gérard Genette）が「先説法」や「後説法」という言葉で説明するように、語りの途中で「未来」の出来事を先取りして語ることもできれば、いま語っている出来事よりも「過去」の出来事へと遡って語ることもできる。加えて、こうした「時間」に関する特殊な事情は語り手側だけの問題ではなく、勿論読者側からみた時にも同じである。読者は読むページさえ変えてしまえば、いつでも、「現在」語られている内容とは別の時間（既に語られた出来事であれ、これから語られる出来事であれ）の出来事を現前させることができるのだ。この点で、物語を読む行為と、『指輪物語』における、静止したものとしての時間の世界を経験させる夢は確かに類似していると言える。

このように物語を読む行為と本作における夢を見る行為に共通点が窺える一方、『指輪物語』では、水を渡る行為と「物語」世界に入る行為が関連させられてもいる。そもそも、閉鎖的な社会に暮らすホビット族にとって、自分達が暮らすホビット庄（the Shire）の外は、エルフ族など彼等にとっては「おとぎ話」の世界の住人が暮らす世界として認識されており（例えば作品冒頭の、サムとテッド・サンディマン（Ted Sandyman）の会話などを参照。ここでは、テッドによって、庄の外の世界の出来事は「おとぎ話」の世界の出来事と位置付けられている（1: 58-59)), フロド達が旅に出る為にブランディワイン川（the Brandywine）を渡ったことは、彼等がそれま

で「お話」の中で聞いてきた世界へと足を踏み入れるその一步となる行為であった。この他、これまで言及してきたロリエンのような地も、ホビットに限らず旅の一行の多くの者にとって、伝説の地として導入されており、そこへ行く為には川を渡ることは夢の中に入る行為であると共に「物語」の世界へと入ることとも同定されているし（このことはサムが、眠っているか起きているか定かではない様子で、自分が「歌の中に入ってしまったように感じる」と述べることなどに顕著に表れている（1: 457)), フロドが最後に渡る大海の先の国が神話に語られた神々の世界であることなども例として挙げられるだろう。このように本作では、水を渡る（水に入る）ことは、夢の中へと入っていくことであると共に、「物語」の世界へと入っていくこととも同一視されているのである。

このように、水の中の夢は、時間が静止した物語の中に入っていく行為とも受け取れるのであるが、水の中の夢が生と死に関して二面性を持っていたように、物語世界を経験する行為もまたそれを体験する者にとって二重の意味を持つことが描かれてもいる。ガンダルフは旅を終えてホビット庄に戻る4人のホビット達に、旅での経験（即ちホビット達にとっては「お話」の中の出来事のような経験）は、故郷でのこれからの困難を乗り切る為には彼等を鍛えてくれたのだと述べる（3: 1304）。確かに、故郷の外での世界の出来事に無関心であった他のホビット達が、今ホビット庄に起きている困難に一向に対処できないのに対し、旅から戻って来たホビット達は旅で得たものを活用してそれを解決してみせる。この点で、旅の経験（夢—物語の経験）は彼等にとって有意義なものであったと言えるのだが、一方、目覚めている世界（「現実」、日常の世界）を蔑ろにすることについては否定的にも描かれている（メリーは、自分達の日常と比べて「高み」（“the heights”）にある世界を知れて良かったと述べつつ、自分達の普通の暮らしの深みを理解することの重要性にも言及している（3: 1139)). 本作の結末でフロドが大海を渡り神話の地に向かったのは救いを与える結果ではあるものの、この作品の本当の結末が、フロドを見送ったサムがホビット庄の日常へと戻り子供を抱き上げるシーンであることは重要だろう。静止した時間の世界を体験させる夢がそうであったように、物語の特殊な時間の中に留まることもまた時の流れによって生み出される生命の巡りからは逸脱する行為となるのである。

以上みてきた通り、『指輪物語』の水の中の夢に関して考察することは、読者の読書体験に関して内省することにも繋がる。水の中の夢は、静止した時間を経験する夢の両面性を描くと共に、読書行為の両義性をも表現するも

のであるのだ。夢—物語の経験は夢見る者—読者に束の間の癒しや充実した経験を与える一方で、その経験は、目覚めている世界—日常での暮らしにおける生命の巡りの為にこそ必要であることを本作は描いているのである。

註

¹ 『シルマリルの物語』の中では、絶対神エル (Eru) が、エルフ族には今生で至高の美を享受することを、人間族には「この世界の先にあるもの」を目指す心と今生の運命に縛られない力を、与えたとされている (*The Silmarillion* 35-36)。また、不死が一種の呪いである点については、例えば「妖精物語について」(“On Fairy-Stories”) (1947) と題されたエッセイの中で、「妖精物語は不死の重荷を描くのに適した物語」であることにトルキンは言及している (“Few lessons are taught more clearly in them than the burden of that kind of immortality, or rather endless serial living, to which the ‘fugitive’ would fly.” (“On Fairy-Stories” 68))。

² 木の髭 (Treebeard) はこのことを、ロリエンが時代から取り残された場所である (つまり、周囲の時間の流れから置いて行かれた場所である) との説明と共に述べている。夢と時間の静止がここでも関連付けられている。

³ モルドールと「夢」の繋がりでは、その国の入口の一つにある、塔の近くの風景が、“an uneasy dream” (2: 921) でみるような光景であるとされることや、その場所で敵の軍勢が出陣していく様を目撃するフロドが “half asleep” (2: 923) だと言われること、またこの後述べるように、サウロンとの戦いが現実化された悪夢だと定義されることなどが例として挙げられる。

⁴ 旅に出ていた4人のホビットが故郷の日常の世界に戻る時、「だんだんと目が覚めていくようだ」 (“It seems almost like a dream that has slowly faded.”) と述べるメリーに対してフロドは「自分にとっては再び眠りにつくようだ」 (“To me it feels more like falling asleep again.”) (3: 1305) と答える。エルフやサウロンと出会ってきた冒険の方がフロドにとっては現実となっていることを踏まえると、彼がもはや故郷の日常的な暮らしで癒されることがないことは容易に理解できる (故郷でも時折指輪を失くした喪失感が発作となって襲い掛かり、その時のフロドの様子は「半分夢見ている人のよう」と表現される (“he seemed half in a dream” (3: 1340)))。

⁵ トルキンは、妖精物語について自身の考えを述べたエッセイ「妖精物語について」の中で、(通常の演劇は視覚情報が優先される為に、不可思

議を表現するファンタジーとは相性の良くない媒体であるが、妖精が作った Faërian Drama はそれを体験する者を物語世界に完全に没入させるほどのものであるとの文脈で、“Faërian Drama”を夢に譬える (“On Fairy-Stories” 52)。一方ル・グウィン、カール・ユング (Carl Jung) の分析心理学に触れつつ、無意識が作り出す夢の表現方法が象徴的であることがファンタジーの象徴性と類似することに注目した上で、“The great fantasies, myths, and tales are indeed like dreams: [...]” (Le Guin 62) と述べる。アトベリーの場合もル・グウィンに似て、無意識の夢が作り出す現実にはあり得ない組み合わせとそこに我々が神秘的な意味を見出すことが、ファンタジーのあり方と類似することを指摘し、それ故に多くのファンタジーが夢という装置を実際に物語に導入してきたことについて論じている (Attebery 7-8)。

⁶ 物語 (言語活動) 内で表現される行動は、物語の構造上一定の意味を持ち得る物語要素 (シーケンス) として要約されるものであり、実際の時間経過とは当然照応しない。それ故バルトの言葉に従えば、「物語の観点から見れば、われわれが時間と呼ぶものは存在しない。あるいは少なくとも、ある記号学的体系の要素として、機能的にしか存在しない」(バルト 23-24) となる。

引用文献

以下、本論で直接言及した作品のみ引用文献として記す。

Attebery, Brian. *Strategies of Fantasy*. Indiana UP, 1992.

バルト, ロラン 『物語の構造分析』花輪光訳, みすず書房, 2014.

Flieger, Verlyn. *A Question of Time: J. R. R. Tolkien's Road to Faërie*. Kent State UP, 2000.

ジュネット, ジェラルド 『物語のディスコース—方法論の試み』花輪光, 和泉涼一共訳, 水声社, 2013.

Le Guin, Ursula K. *The Language of the Night: Essays on Fantasy and Science Fiction*. G. P. Putnam's Sons, 1979.

Tolkien, J. R. R. *The Lord of the Rings*. HarperCollins Publishers, 2007. 3 vols.

---. "On Fairy-Stories." *Tree and Leaf with "Mythopoeia" and "The*

Homecoming of Beorhtnoth Beorhthelm's Son", HarperCollins Publishers, 2001, pp. 1-81.

---. *The Silmarillion*. Edited by Christopher Tolkien, HarperCollins Publishers, 1999.